

ゆうれい飴

1. 昔むかし、桑名に飴忠^{あめちゆう}という
あめ屋がありました。

ある夏の夜、あめ屋の戸をたたく音がします。あめ屋の主人が戸をあけると、若い女が青ざめた顔で一文銭^{いちもんせん}を差し出して立っておりました。



2. 「あめをひとつ、ください」

女の手は白くひんやりとしていました。あめを受け取ると、女は静かに頭をさげて立ち去りました。それから毎夜、女はあめを買いにきます。そしてあめ屋が銭勘定をしていると、銭箱にしきみの葉が入っているようになったのです。「どうもあの女が怪しいわい」あめ屋は女のあとをつけることにしました。暗い夜の中、かすむような女の姿は寺へ向かっていきます。



3. 女は浄土寺の門をくぐり、
墓地のそばで、すうっと消えました。

「ゆ、ゆ、ゆうれいじゃあ!」あめ屋の主人は、ぶるぶる震えて、住職を呼びました。「ひょっとして、先日亡くなった旅の女かもしれない。おなかの中に赤ん坊がいたようだが……」住職は墓を掘り返してみることにしました。



4. おそろおそろ墓を掘り返していると、
中から赤ん坊の泣き声が聞こえてくるではありませんか。

棺^{かんおけ}桶のふたととると、死んだ女が赤ん坊を抱いていました。しかもその赤ん坊は、女が買ってきたあめをしゃぶって、元気な泣き声をあげていたのです。



5. 「この子のために、お乳代わりに
あめを買ってきては、なめさせたのじゃなあ」

ゆうれいになってまで、赤ん坊を死なせまいとした女の心を思い、住職はお寺で赤ん坊をひきとって育てることにしました。大事に育てられた赤ん坊は、たくさん勉強して、のちに偉いお坊さんになったそうです……おしまい。



夏の夜の、ちよっと怖い昔話。毎年、地藏盆^{じぞうぼん}に桑名の浄土寺で子どもたちが売る「ゆうれい飴^{あめ}」には、悲しくもあたたかい伝説があるのです。「子育てゆうれい」などの名で各地に伝わる話ですが、桑名の話はアニメにもなりました。

母親の愛を伝える

桑名の昔話

アニメ「まんが日本昔ばなし」で放送され、全国的に知られた桑名の「ゆうれい飴」のお話。墓の中で生まれた子を育てるために母親が幽霊となった話は、京都など全国各地に伝わっています。昔は亡くなると三途の川の渡し賃として六文の銭を握らせて埋葬したため、6日目までは女が一文ずつ銭を払ったものの、7日目から葉っぱに変わったとか、子どもを引き取ったのはあめ屋の主人であったとか、諸説あります。

桑名で話の舞台となっている浄土寺の住職いわく、「お墓の中で赤ん坊が生まれてしまうのは、現代の医学とは異なる江戸時代ならば、各地でまれにあり得たことかもしれないですね。臨終の際は、医者より先に僧侶が行くこともある時代でしたので、仮死状態で土葬されていたのかもしれないし、水子供養の一環として、あめなどのお菓子や棺桶に入れていたのかもしれませんが」とのこと。

飴忠は浄土寺門前・三崎通りの角にあつ

たとか、ときは元禄半ば（1695年前後）であったとか、桑名ではかなり具体的に伝わっています。さらに、この墓から生まれた赤ん坊は「飴子日親」という僧侶になったとされており、この僧が描いた「特殊曼荼羅図」が東京都葛飾区の旧家で1976年に発見されたといわれています。

浄土寺では、毎年8月23日・24日の海中出現延命地藏尊の御開帳の日に「ゆうれい飴」を販売しています。売り子は地域の子どもたち。大人は手を出さず、子どもたちの貴重なお店体験の場になっています。「この日は、近所の子どもたちがたくさん集まってきます。あめが売り切れたあとには肝試しを始めていますよ」と住職。子どもたちの笑顔に、御開帳のお地藏様もほほ笑まれているかもしれません。「子どもと親の悲しいニュースが飛びかう現代だからこそ、ゆうれい飴の話は考えさせられます。面白い話ではないけれど、母性に心を打たれますね」と住職は語ります。



地藏盆のときの浄土寺

ゆうれい飴を買いに行こう

地藏盆の2日間で限定500個。
子どもたちが売る、素材なあめ。

地藏盆の御開帳にあわせ、市内の和菓子屋で作られた素材で懐かしい味のゆうれい飴を、浄土寺の境内で販売します。どんなに依頼があっても、この日以外は作らないことになっているそう。売り切れ次第終了です。

なお、浄土寺は桑名の初代藩主、本多忠勝の墓があることでも知られています。

とき 8月23(水)・24(木)

いずれも午後6時～9時

場所 浄土寺(清水町45)

料金 1個100円

数量

2日間で500個

(売り切れ次第終了)

問 浄土寺

☎ 22-5816



この記事に関するお問い合わせは、秘書広報課
☎ 24-1492 FAX 24-1119へ。